

4519  
1-3

秋齋桂先生細註

武門古實百箇條

九方子評閱

不朽閱



序

予讀秋齋桂先生所著武門古實百箇條者。歎曰。嗚呼。是天下武弁之士必讀之書也。蓋我邦元和韃橐之及。昇平二百有年。人人文恬武熙。美名溫衣。逸居於華。居繡紗之下。而不知其辭。明之內也。治武用之具。名物之失實。

武門古實百箇條

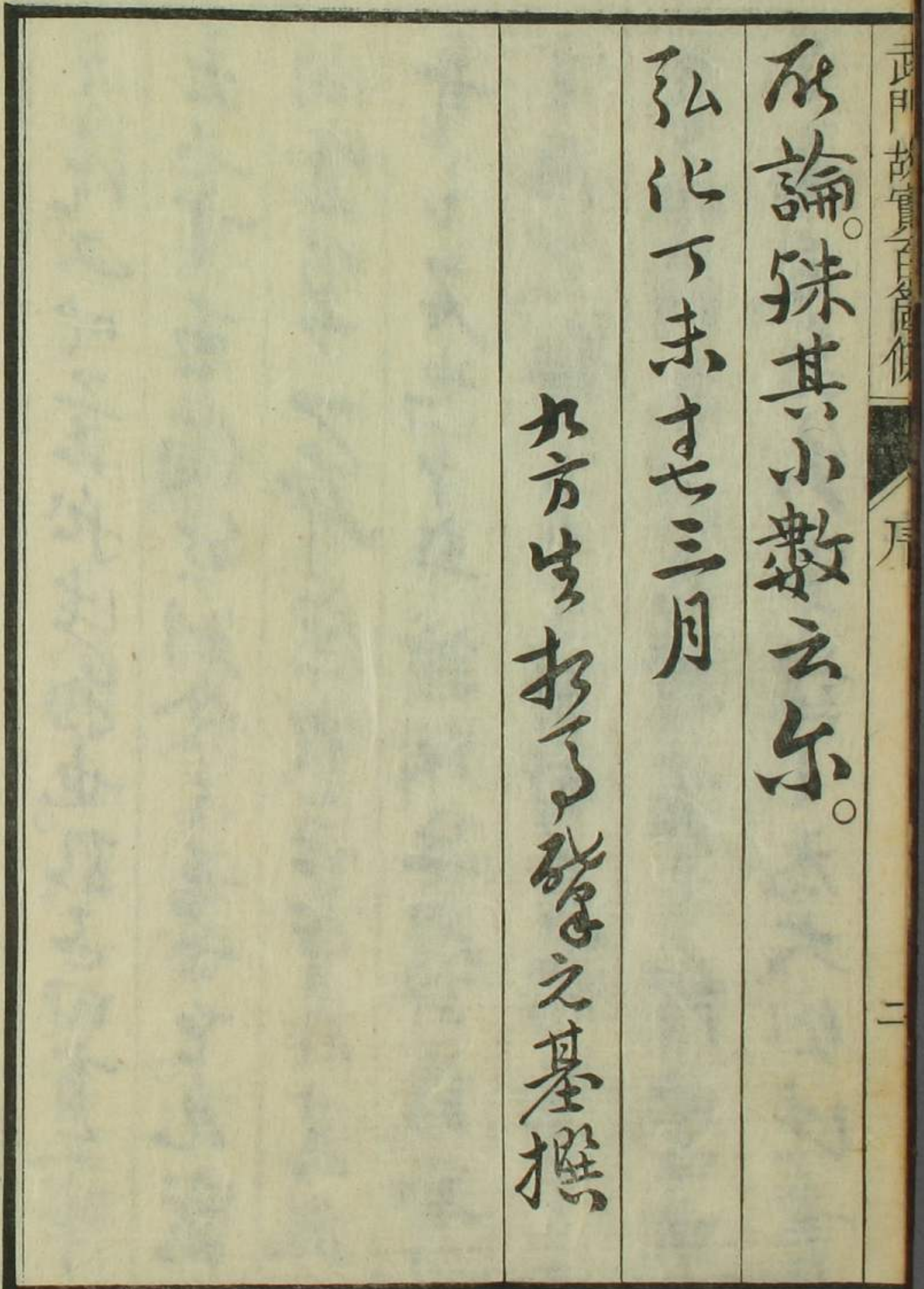
制度之於古。不啻數十。隨失隨亡。甚  
 者其所以稱道名物。茫如不知  
 其為何物。嗚乎。在道之不講久矣。所  
 以先生有述也。夫我邦中古以來。  
 主霸之道。兵農殊業。除王公縉紳  
 家之外。其為士者。皆以武稱之。而其持  
 文筆。沒於官。仕於國者。惟小吏卑隸

之法。又以其若此物也。孔子曰。有文事  
 者必有武備。然則今之為士也。凡案  
 間宜有以存。庶或無辱於其武  
 弁之名也。予卒讀河。安加評語。聊  
 言所見。鄙言之將。於左。先生之  
 意也。雖然。武者撥流之謂也。有武  
 之為用。兵出軍謀之為大。則此書

所論殊其小數云尔。

弘化丁未七月三月

九方生抄了、學之基撰



武門故實百箇條目錄

卷之一

- 一 アゲマキ
- 一 キセナガ
- 一 目貫
- 一 シコロノ傳
- 一 軍中和睦ノ盃
- 一 ヤジリヌキ古義
- 一 一番頸古義
- 一 頸帳ノ習

武門故實百箇條

卷一

一

- 一 味方忌ムベキ筆
- 一 オドシゲ習ノ義
- 一 鞭ノ寸法
- 一 討手出陣ノ古義
- 一 鎧ノ引合ニ入ル、夕、ウ紙兩種ノ傳
- 一 佩タテノムチサシ
- 一 ヒゲ切銘ノ義
- 一 刀劍コシラヘノ良辰
- 一 弓ノ鞞
- 一 鞞ムスビ

- 一 陣扇兩様
  - 一 四方
  - 一 ツルマキ
  - 一 糸ツ、ミ
  - 一 ホロヲ臺ニ上ルノ義
  - 一 忍ノ緒ノ義
  - 一 太刀馬代ヲ以テ禮トスルコト上古ノ式ノ義
- 卷之二
- 一 下知狀萃押ノ義

一 預リノ囚ノ事

一 太刀刀コシラヘルニニワケアル義

一 八幡座

一 鎌倉下ケ緒ノ義

一 誓紙認ル古式並起請ツギノ事

一 軍中神祭法

一 筒守並鎧守

一 持ノ太刀

一 幕ニ習ヒアル義

一 矢文

一 鉢卷ノ用

一 鎧ノイレヒホ

一 キヤウヨウノ古式

一 八幡殿ウキラカケラ

一 八マン殿クリシメ習

一 鎧ノカキ合

→ 毛クツ

一 ツカマワリ

一 サヤマワリ

一 メデサシ

一 懷劍

一 出陣賀詞

一 武神

一 武官 并勳位

一 武功

一 勳功大寶令ノ事 并手カラニ次第ノ事

一 高名

一 犬笠カケ

一 遠笠カケ

一 吹返

一 士侍ノ辨

卷之三

一 鏡ノ鞆

一 旗ノ古製

一 サシ物ノ習

一 小口袋

一 八夕袋古傳

一 馬印

一 笠標

一 冑ノ立物

武門古實百箇條

卷一

四

一七手ノカケハヅシ古義

一ホロクシノ傳

一遠ト、メ

一ハヤヌリ木

一調度懸古義

一腹卷

一チ、ミモノ

一タテナシ

一武士元服ノ古禮

一日本古ノ軍義

一カウガヒニ五用ノ義

一六具ニ習ノ事

一シト筒



一六具三層ノ車  
 一六具三層ノ車  
 一六具三層ノ車



武門故實百箇條卷一

秋齋桂先生細註

讚岐

相馬肇元基

評閱

美作

小原復元禮

校正

一 アゲマキ

アゲマキハ總角ノ文字ニテ異國ニテ用ル物  
 ナリ日本ニテモ兒女ノ髮ヲ額ニテニツニワ  
 ケ角ノヤウニ結ビタルヲアゲマキト云フ額  
 ヘアゲテ卷クトノ義ナリ鑑ノアゲマキハ右  
 總角ノ形ニ結ブニ因テ借り名ケシナリ是レ

武門故實百箇條

卷一

五

二サマぐノ説アリアゲマキハトシボウ結ビ  
ナリ是レ日本ハ秋津鳴ナレハ蜻蛉ノ形ヲ背  
二負フナド、説ヲ設ケテ徴文モ明カナラザ  
ル事ヲ云フ流義アリ又流義ニヨリテ大將ノ  
鎧ノ外ハアゲマキヲ付ズナド、云フ説アレ  
氏太平記ニ妻鹿孫三郎勇力ノ條ニ雜兵ノア  
ゲマキヲツカミタル事見ヘタリ然レハ其僻  
言ナルコト知ルベシサテアゲマキハ何ノ夕  
メニ付ルモノト云フニ第一ハ鎧ノ大袖ヲカ  
ラミアゲ第二ハ味方ニ手負アル時負ノテ退

クソナヘナリ其手負ノ總角ヲホドキ我が肩  
ヘレンジャクニカケ足ノ所ニテ一重廻ノ結  
ビ付ケ我が兩ノ手ヲ自由ニ働クヤウニシテ  
敵ノ慕ヒ來ルヲ切り拂フテ退クナリ其時我  
ガアゲマキハ手負ノ胸ヘセカレテ鎧ト鎧ト  
ノ間ノアテニナルユヘ手負ノ胸痛マヌナリ  
サテアゲマキハ都テ赤絲ノ組ヒモヲ用ユ隨  
分太ク遅クスベシ尤モ長ケ一丈五尺ヲヌキ  
通シニシテ片ミ七尺五寸ニナルヤウニスル  
ナリ赤色ハ日輪ノ色ヲ背ニ負ヒタル心ト立

テ、實ハ血ニソマリテモ目ニタ、又ヤウニ  
トノ用意ナリ短カケレハ飾リバカリニテ用  
ニ不立ナリ併シ近代ノ具足ニハ指物ヲサス  
ユヘ合當離ト云フモノアリテアゲマキ付ラ  
レヌナリ指物ハ上代ニハナシ文明年中尼子  
ノ家臣山中鹿之介ト云者鹿ノダキ角ノ指物  
ヲサセリ働キ殊ノ外花ヤカニ見ヘタルヨリ  
人ニコレニ習ヘルト云ヘリ

九方子曰。方戰爭之時。總角與背旗。其利孰優  
孰劣。天下之武弁。孰射乎。孰御乎。

一キセナガ

小笠原家ヲ始トノ俗禮家何レモキセナガト  
云物ハ常ノ鎧ト別製ニテ違ヒアルヤウニ心  
得大將ノ御キセナガトテ威シ方別品アリト  
云ヒナセリ何ゾ惑ヘルノ甚キヤキセナガモ  
鎧モ一ツモノナリ主人ノ鎧ヲソノ臣トノ敬  
ヒ稱ル時御キセナガト云フナリ別製アルニ  
アラズ平家物語ニ義仲粟津ノ松原ニテ申サ  
レケルハ日頃輕ク覺ヘ候鎧ノ今日ハ重ク覺  
ルゾヤトアリケレハ兼平申スヤウハ日頃輕

夕覺へ玉ヒシ御キセナガノ今日ニ限りテ重  
キハ御心ノ臆シタルニヤト云ミ又太平記ニ  
師直屋敷へ夜討入シ時上山九郎床ニカザリ  
シ鎧ヲ取テ肩ニカケタレハ師直家人共コハ  
執事ノ御キセナガニ候モノヲト申タルヲ師  
直ハタトニラシテ某ガ命ニ替ラズル人ニ  
鎧一領惜ムベキヤハト云ミ右自分ニハ鎧ト  
云ヒ臣ヨリハキセナガト云フモト是レ不  
ナルヲ知ルベシ

九方子曰。辨得有據。

一メヌキ

今ハ鮒形ノ金ヲサシテ目貫ト云フ古ハ今ノ  
目釘穴ヲ目ヌキト云ヘリ目釘ヲ打タメノ穴  
ヲツラヌキタル故ナリ延喜式中古記ナドニ  
見ヘタリ目釘ノヌケザルヤウニト上ノ蓋ニ  
打タルモノヲ鮒形ト云フ是レ古法ノ目ヌキ  
ハニ夕所程ニアリテ押ヘニスル金モ長クス  
ヘテ鯉鮒ノ形ヲ作テ打タルナリ太刀ノ時ハ  
柄頭ニ下ルツユニモ小サキ鮒形ヲ付ルコト  
アリ延喜式ニ鮒形トアリ後世ノヤウニナカ

ゴヲ折ミヌキテ見ルコトナシ重テコシラヘ  
ナラスマデハヌケザルヤウニ目釘ノ押ヘニ  
スルモノナリコレヲ以テ見レハ古ノ目貫ハ  
目釘ノ穴ト心得ベキナリシカシ中古ヨリハ  
目釘押ヘノ鮒形モ通ノ目ヌキト唱ヘシニヤ  
拾遺集ニ

白カ子ノ目貫ノ太刀ヲサケハキテ

奈良ノ都ヲ子ルハ誰カ子ソ

ナド、詠タルハメクギオサヘノ事也サテ本  
式ノ太刀ヲコシラヘント思フ時ハ目釘オサ

ヘハ必ズ魚ニ作ルベシ元來ノ鮒形ノ名ニ稱

フナリ鯉口 鮫 鵠目鵠ハシド、ト云フ水

ルナリタト云ヒサテコノフナ形ト云フモ太刀

ハ水ノ縁ヲ以テ作ルナリ其身潤澤ノ光ヲ増

サシメントノ義也

一シコロノ傳

古ノシコロハカケハヅシナリソレユヘシコ

ロノ一ノ板ヲ鉢付ノ板トイフコレ鉢ヘ付タ

リハヅシタリスル故ナリ仕ツケノモノナラ

バ鉢付ノ板ノ名アルベカラズ保元平治ノ物

語ニ清盛アマリニウロタヘ宵ヲ後日サマニ  
著テ出デラレタルヲ重盛咎メタマヘバ後日  
ニ天子ヲ負ヒ奉ルユヘニト申サレタル事ア  
リシコロアル宵何ゾウシ日サマニ著ラルベ  
キコレシコロヲ外シタル宵ナレバナリ景清  
ガシコロ引モ無實ノ説ナド、イフ人アレ  
縦ヒ無實ニモセヨシコロノ切レタルトハ稻  
妻金ノハヅレタル體ナリ宵ノ後日ニ稻妻金  
ヲ五ツ打テシコロノ一ノ板ニ鑲ヲ付ケカケ  
タル由古物彙典トテ足利家ノ古器ヲ載セタ

ル書ニ見ヘタリ

一軍中和睦ノ盃

是ハ軍中ニ限ギラズ士タルモノ同輩同年ノ  
人諍論ノ事出來タル時中立ノ人アリテ和睦  
サセ其シルシトノ中人ノ許ニテ盃ヲ出スコ  
トナリ知行ノ高下格式ノ貴賤アルカ又ハ武  
藝ノ事ニ依テ同流義先進後進ノワケアルカ  
ナレハ次第アルベケレ比年數格式同輩ニノ  
異義ニ及ヒ和談ノ時ニ至リ盃ノ先後ニテ又  
ニ和睦破ル、事アリ一格モオトサレ問敷ト

スルモノユヘサカツキノ作法ムツカシ、足  
 利家ノ作法ニ盃持二人雙方ヘ一度ニスヘ酌  
 人モ二人雙方ヘワカレ一時ニ飲セ兩方ノサ  
 カヅキヲ酌人一度ニ取テトリカハス事ナリ  
 是ニテ仲人ノ誤リモナク異義ニ及ハズトコ  
 ノ作法

神君様ニモ御用ヒ被遊レシニヤ寛明日記ナド  
 ニモ

台徳院様ノ御時同格諍論アリシ時右ノ盃ノ體  
 見ヘタリヘ

九方子曰如以官之高卑秩之多寡藝之先後  
 則其爭固不可有焉既有爭焉而如論之則是  
 所以益長爭也

一ヤジリ拔キ古義

ヤジリハ射コミタル物ユヘ過テ立タルハリ  
 クギノ類トハ違ヒ拔キカタキ物ナリ軍士常  
 ニ鎧ノ引合セニ用意スベキ藥アリソクイ、  
 ニオジ雜セ疵口ニ張レハイカホド深ク入タ  
 ルヤジリニテモヌケズト云コトナシ矢ノ筈  
 ノ折レタル時ハコノ藥ニアラザレハヌケカ

タシ盛長日記其外古書ニモコノ藥法見ヘタ  
リ  
神君様ニモ殊ノ外御祕藏アリシヨシ申シ傳ヘ  
リ

藥方

蠶娘生キナガラ紙袋ニ入レ三重程ニオ、フ  
テ陰干ニス袋一重ナレハ喰ヒ破ルユヘナリ  
又何ン匹モ一ツニ入ルレハ友喰ニクヒ殺ス  
ナリソレユヘ一匹ツ、入レ置キ二十日メ程  
ニハ死ヌルナリ○蝸牛皮ヲ去リ陰干一ツ○

牛ノ蠅陰干三ツホド

右三品細末ニシテトモシ油一滴飯ノリニマ  
セ竹ノヘラニテオス試ミニ柱ナドヘ釘ヲ打  
コミ此藥ヲ其頭ニ張リ置ケハ翼朝ハ頭少シ  
拔ケ出ルナリ鐵ヲ吸ヒ出スノ妙法磁石モ不  
及トナリ

九方子曰。其効果如所言。則不啻軍中之祕  
藥也。余將驗之而未果也。

一番頸古義

一番頸ト云フハ只一番ニ取タルクビニハア



ラス鎗下ノ高名ノ一番頸也鎗下ノ高名ハ一  
番ヨリ二番マデニテ三番ト云フハナシクビ  
ヲ取ツテ來リ次第ニ帳ニ附ル也ヤリ下ノ一  
番クビニ番クビ計リハ一番誰レガ頸誰レ討  
ト書クニ番コレニ同シ信玄信長ノ頃ハヤリ  
下ノクビ一誰レニ誰レト書タリ大阪陣ノコ  
ロヨリ只一番頸ニ番頸ト書クヤウニナリタ  
リ一番ナケレハ鎗下ノ頸誰ト計リカクナリ  
鎗下ノ一番頸ハ大切ノ事ナリ大阪陣ニ秀頼  
公ノ右筆白井甚右衛門一番頸ヲ不見ハ一番

クビトハ附ケ申ス間敷トイハレシ事難波戰  
記等ニ見ヘタリ大阪ノ太亂ニ常ノクビアニ  
ニ番クビナカラシヤ鎗下ノ高名ユヘ鎗下ノ  
高名ノ一番ガナクバト云フコトナリ  
九方子曰。所以有ニ番頸而無ニ番頸者。物翁  
鈐錄論之盡矣。此欠其詳。

一 頸帳ノ習

頸帳ハ筆ノサヤヲ毛半ヘカケテ書クナリ爭  
ヒアル時其サヤヲ向フヘヌキ出シ小口ニ墨  
ヲ付テ丸印ヲ付ケ置キ其日ノ事治リテ後ニ

軍奉行へ相談シ評議ノ上事ヲ定ムルナリ  
一味方忌ムベキノ筆

黒軸ノ筆ヲ忌ム惣體禁中堂上ニハ今ニテモ  
黒軸ハ不用トナリ葬禮ノ帳付筆極メテ黒管  
也コレヲ鈍筆ト云フ武家ニテハ切腹ノ言ヒ  
渡シ死罪人ノ科狀獄門磔ノ立札何レモ黒管  
ヲ用ユコレニヨリテ心アル武士ハ萬一硯箱  
ニ黒軸筆アリトモ祝儀ニハ用ユベカラズ慈  
昭院殿日録ナドニハ青軸ノ筆ヲ常ニ用ユベ  
シ別色ハ皆凶事ニ用ユトアリ然レバ赤軸モ

可忌ナリ青管ト云ハ白軸ノコトナリ  
一オドシゲニ習ノ義

惣體五性ニ合セテオドシゲノ色ヲ分ツテ何  
性ハ何色ト云フ事小笠原流ヲ始メ諸流共ニ  
コノ傳アリ第一當流ハ人ニ何性ト云フ事ヲ  
取ラズ故ニ一向ニ其論ナシ殊ニ先祖傳來ノ  
甲冑源家ノヒザ丸薄金盾ナシナド代々大將  
ノキセナガトナル古物ユヘタトヘ絲ヲ引替  
テモ色ハ最初ノマ、也其代々ノ大將六十甲  
子同ジメダリニ性ヲ合セテハ生ルベカラズ

是ニテ台點スベシ又小笠原甲冑傳ト云モノ  
ニハ源平藤橘ヲ分テ藤原ハ紫オドシ橘ハ黄  
絲オドシ平家ハ緋オドシ源家ハ白絲オドシ  
ヲ正色トスルヨジ嗚乎ソレ何ゾ人ヲ誣ルノ  
甚シキヤ東鑑平家物語太平記ナドニテ知ル  
ベシ何氏ニヨラズ惣大將多クハ緋威ナリ其  
外太平記ナドニ討歿ノ歳ヲ書タル人ソレヨ  
リ前ノ甲子ヲタリテ五性ヲ合セテ見ルニ出  
立ヲ書タル鎧ノ毛トハ少モ不合近代ノ俗説  
ナルコト可見也○五ツ衣ト云フモノヲ姫宮

ナドヘ奉ルトキ色ノ重子ヤウアリコノ例ヲ  
以テ五性ト云フモノニ合サバ故實トモ云フ  
ベキカ左アルトキハ木性ノ人ニ水ノ色黑絲  
オドシノ類火性ノ人ニ木ノ色青絲萌黃絲ノ  
類土性ノ人ニ赤絲緋絲ノ類金性ノ人ニ黃絲  
ノ類水性ノ人ニ白絲ノ類コレハ其甲冑ノ色  
ヲ其母ニノ木性ナレバ水生木ト水ノ黑絲オ  
ドシアリコレ全ク裝束ノ比類ニテ室町家ニ  
ハ是ヲ用ヒラレタリ全體五性ト云フコトヲ  
信ゼザレバ取ラズトイヘ氏知リテハオクベ

キ事ナリ

九方子曰。凡神異禁忌五行家言。皆不可信用也。既不信五性。又何取於筆管之色哉。然而軍旅之爲道。使驅衆愚而赴諸鋒鏑者。非此則逆衆而不能得其心。故忌其可忌。神其可神。五行家之言。有時乎亦將略所不廢也。

一鞭ノ寸法

諸流各ニムチノ寸法ニ長短アリ。コトノ故實ニ疎キユヘナリ。弓ニテモ馬ニテモ鞭ヲ許スト云フコトハ其師匠ヨリ師役ヲユルスト

云フ事ニテ藝ノ至レルヲ可スル印也。夫故其師匠ノ持タルムチヲ其弟子ヘ傳ヘ人ヲムチセヨトノ義ナリ。コノムチ家ニ傳ハリ其流義ノ祖ノ寸法ヲ用ユルユヘ是ハ小笠原流ノ鞭是ハ大坪流ノ鞭ナド、寸法長短出來セリ。大將ヨリムチヲ御許サル、ト云フハ軍配ヲ御許サル、事也。馬上ノ人誰カムチヲトラザランヤ御許サル、ト云フ名目ハ軍配ニアリ。我が組子限リニ支配スルハムチヲ御許サル、ニハアラス惣テ軍勢ヲ指揮スルヲイフナ

武門抄卷之百餘條 卷一  
リ尤モ大將ノ惣下知ナレモ多勢ノ時一度一  
度ニ大將ヘ伺フ事ハ仕ガタシ十人モ二十人  
モムチ御免ノ人アリテ下知セザレバ行レガ  
タシサレバムチノ寸法其大將ヨリ拜領ノム  
チ其家ニ傳ハリ即チ子孫ニ至リ手本ト成  
リ此方ノ家ノムチハ何尺何寸ナド、イフ輩  
アルナリ片腹痛キコトナリ元來鞭ノ本寸其  
人ノ大ズイ骨ヨリ右ノ中指ノ先迄ヲソノ人  
ノムチノ寸法トス弓ニムチハイラズ人數ヲ  
取廻スニムチモイラヌナリムチノ用ハ馬ニ

アリ其大將ノ馬ノ鞭ヲ下サル、ガ即チ人數  
ヲトリ廻ス印ナリ是ハ其人其軍限リノコト  
ナリ大將ノ御名代トナル心ニテ大將ノ寸ヲ  
其一、用ユルナリ子孫軍配ノ器量モナクノ  
是ヲ用ユルハ非ナリ譬ヘバ秀吉公ヨリ拜領  
ノムチナリトテ今 御當家ニ仕ヘナガラ其  
ムチヲ用ユルハ 御當家ノ下知ヲ用ヒズ今  
ニ秀吉ノ下知ヲ用ユル印トスルニアタルナ  
リ弓ニテモ其師匠ノムチヲ藝道至極ノ印可  
ニアタフルコトアリ是モ其人一代限リノ事

二テ子孫へ及フコトニハアラス自分ニ製作  
スル寸法ハ右ニイノ通り大ズイ骨ヨリ右ノ  
中指ノ先マデ銘ミノ寸ニ合セテ作ルベシ何  
流ノムチハ何尺何寸ナド、イフコトハ決メ  
ナキコトナリ

九方子曰卓見矣。

一討手出陣ノ古禮

朝敵退治トシテ向フ時ノ大將軍出陣ノ時弓  
ノ鳥打ヲ三寸バカリ白紙ニテ卷ク事ナリ盛  
長日記ニ見ヘタリ平家物語ニ義經出陣ノ條

二モ見ヘタリ洛中ニ其朝敵ノ屋敷アリテ其  
モノ本國ニテ謀叛ヲ起スナレバ討手ノ大將  
其屋敷ヘ向ヒ一矢射カケテ而後打立ツ事ナ  
リ又屋敷ナキ時ハ其朝敵ノ方ヘ向ヒ鳴弦シ  
テ立ツナリ屋敷ヘ向ヒ一矢射ルコトハ長門  
本ノ平家物語ニモ委ク見ヘタリ縦ヒ朝命ヲ  
不蒙ト云ヘ此討手ニ立ツ人ハ萬事コノ心得  
アルベキコトナリ

一鎧ノ引合ニ入ル、夕、ウ紙兩種ノ傳

古書ニ鎧ノ引合セヨリ夕、ウ紙取り出シテ

武門故實百箇條 卷一  
ナド、アリコレニ大夕、ウ紙小夕、ウ紙ト  
テ兩種アリ大夕、ウ紙ハ檀紙或ハキツキノ  
厚紙ヲ色ニ深テ持コトナリ松ノ夕、ウ紙  
ト云フハ表青裏黄ナリ是ヲ薄葉ニテ製スル  
時ハ青紙ト黄紙ト二枚カサヌルナリ厚紙ニ  
テハ其二色合セテ染ルユヘ萌黄ニナルナリ  
譬ヘバ櫻ノ夕、ウ紙ト云ヘバ表白裏紅是ヲ  
櫻重ノ薄葉トモ云フ一枚ニテスル時ハ下ヲ  
紅ニテ薄ミトソメ上ヲ白キモノニテソメレ  
バ何トナク底ノ紅ノ色ノウツルヤウニナル

ナリ一通リノ半紙ホドニコシラヘ筋違フテ  
豎ニ折リ夫ヲニツニ横ニ折リ鎧ノヒキ合セ  
ヘ入レ此中へ小夕、ウガミ或ハ藥鍼絲ナド  
ヲモ入ル、ナリ今ニ公家衆ナドニモ其覺悟  
ノ方多シ小夕、ウ紙コレハ半紙ガ本法ナリ  
但シ今ノ半紙トイフモノニハアラス元ノ半  
紙トイフハ直紙ヲニツニ切りタルモノナリ  
是ヲ折合セヤウ十二枚以上二十四枚三十六  
枚四十八枚箇様ニ重ヌルナリ先ツ多クハ二  
十四枚ナリ夫ヲニツ折ニノ四十八枚惣ノ座

故ニオヒテ食物ナドヲモコノ上ニ置キ釜ナ  
ドフモアゲテ釜敷トナシ一切ニ通ノ扇ノ上  
ヘオク程ノ物モコノ上ニ置テ用ヲ辨ゼシコ  
トナリ今ハ其法破レテ古實スタレタリ

一 佩タテノムチサシ

佩楯ニ鞭楯ノ穴トテ前ノ方ニニツアリ俗禮  
者ノ説ニハ步行立ニナル時コノ穴ヘ鞭ヲサ  
シ置テ馬ヨリ下ルトイフ説アリコレヘムチ  
ヲサシテハ働キ不自由ナリサテ佩タテニ歩  
行佩タテ馬上佩タテノ兩様アリ馬上佩タテ

ハ步行立ニナリタルトキ働キニクキモノナ  
リ其時鎧ノ下著帶ノ前ノ所ニ兼テ紐ヲ通シ  
オキコノ穴ヨリ取り出シ紮ベハ佩タテ上ヘ  
アガルナリ是ニテハ働キヨシ其時ハ鞭ヲ馬  
ニサシ留置テ下ルユヘムチサシトハ馬ニ鞭  
ヲサシステ步行立ニナリテハタラク時ノ用  
ニ立必穴ト云フ義ニテ鞭サシト云フナリ  
九方子曰迂廻甚矣必別有説然而其義則已  
有取焉

一ヒゲ切銘ノ義



源家相傳髭切ト云フ太刀アリトハ本據分明  
ナラズ俗説ナリ能ク切レル劍ヲ吹毛ノ劍ト  
イフヲ以テミレバヒケキリハ吹髯ノ義ニテ  
能ク切レル太刀ノ惣名ナリ類聚國史ニ吹髯  
五振ト云フコトアリ人ニ帶スル所ノ刀劍何  
レモ業物ヲ皆髭切ト稱スヒゲヲカケテ切り  
タリトイフ説アレ非也大將ヲ仰付ラレ官  
軍ヲ進メラル、時節刀トイフテ劍ヲ下サル  
事アリ其目錄ニ節刀一腰ト書テ片脇ニヨセ  
テ銘ヒゲ切ト書クガ古實ナリタトヘ銘八大

原真盛小鍛治宗近ニテモ節刀ニハコレヲ書  
セズヒゲ切ト書クヘキ由法性寺關白殿ノ記  
ニ見ヘタリ

一 刀劍コシラヘノ良辰

壺井先生ノ説ニハ刀脇指ヲ打初ル日或ハ節  
ヲ加ヘ初ムルノ日ハ庚申ノ日ヲ吉日トス金  
ニアタレバナリト云ミ先生著ストコロノ本  
朝古今刀劍略記ニモ其事見ヘタリ然レモ是  
ハ先生ノ私説ニシテ古實トモ見ヘズ古實ニ  
ヨレハ土ニアタル日ヲ用ル事ナリ蓋シ戊巳

武門故事百篇卷一  
ノ日ナド用ユヘシ又戊己ニ金ヲ兼テ申酉ノ  
日可然歟是ハ古物彙典ヲハジメ古書ニ多ク  
見ヘタリ戊己ノ日ヲ用ルハ土生金ノ義ナリ  
然レハ土金合體ノ日可然者歟

九方子曰是五行家之說。

一弓ノ鞞

占來ハ鞞ト云フモノヲ弓手ノ臂ニカケテ弓  
ヲ射タル事ナリ其形丸ク巾著ノ如クニシテ  
用ルニ鈴アリ是ヲ音金トイフ當時鞞スタレ  
タルユヘ弦ニ付タル鈹ヲ音金トイフヤウニ

ナリタリ其トモノヒモヲ手ニ卷テ弦ソノ鞞  
ニアタレハ高ラカニ響クユヘ萬葉集ニ

マストラヲノ鞞ノ音スナリ武士ノ大マウ  
チ君タテマツラシム

ナド、詠テ音ノアルモノナリ神代卷天照太  
神武キ備ヘノ段ニモ高トモヲ懸クモウトイ  
フ事アリ中古以後其製廢レタレハコソ勸修  
寺家舊記吉部祕訓抄ニモ圖ヲ出ノ珍器ノヤ  
ウニ書キ置タリ江家次第ナドニハ軍弓ニカ  
ギラズ常ノ的弓ニモ懸タル體ニ見ヘタリサ

テゴノ鞞神物ニハ鹿皮ヲ以テ作ルヨシ延喜式太神宮篇ニ見ヘタリ武事ニハ熊ノ皮ヲ以テ作ルヨシ同書兵庫篇ニ見ヘタリ

九方子曰古器之廢於今者蓋亦多矣必有所以廢之理也今此鞞者其或亦不利於實用焉一鞞ムスビ

ヒ代トモノ緒ノ結ヒヤウヲ鞞ノ緒ヘウツシテ結ブコトナリ是ニ高トモ結ビ平トモ結ビトテ二様アリコノ結ビヤウ射術家第一ノ祕事トスル者ナリ小笠原家鞞緒ノ留メヤウト

テ祕スル者モト是也是ハ業事ナレハ末ニ至テユガケヲ以テ傳ル事ナリ  
一 九方子曰何祕之有、其妄可想、

一陣扇兩様

紅ニ日ヲ出シタル扇紅ノ日出シタル扇コノ兩様ナリ古軍書ニモ兩ヤウニワカツテアルナリ惣金ニメ日ヲ紅ニシタルハ紅ノ日出シタルニテ大將軍ノ御持扇ナリ惣クレナヒニシテ金ノ日出シタルハ紅ニ日出シタルニテ副將軍以下ノ扇ナリ但シ爪クレナヒニ日出

スト云フ時ハ扇ノ上ノ方ヲ赤クノ金銀ニテ  
 ナリトモ朱ニテナリトモ日ヲ出ス是ハ上下  
 通用ノ扇ニテ平士マテ苦シカラズ但シタマ  
 く大將軍ノ扇ニ地紙ヲクレナヒニシテ日ヲ  
 出シタル扇アリ重キガ輕キヲ用ルハ苦シカ  
 ラザルユヘナリ大將ノ外ハ紅ノ日ノ扇ヲ用  
 ズト云フガ故實ナリ

一四方

是ハ甲冑又武者組討ノ時第一用心スベキハ  
 コノ四方ナリ冑云モノ如何ニ結ビ固メテ

モシコロニテモ眉庇ニテモ吹返ニテモ手ヲ  
 カケテ一捻子チレハユガマス云コトナキ  
 モノナリ冑ユガミテハ働レス是ヲ子チユガ  
 メ直ニ打仕スカ又ハ其手ヲ放シ組討ニスル  
 カ古來常ノコトナリ故ニカブトハ四方共ニ  
 取付レヌヤウニスルナリ夫故上古ノカブト  
 ハ筋冑ナレハ筋ノ上ヲヤヒバノ如クニトギ  
 タテ星冑ナレハ尾ノサキヲ鍼ノ如クトガラ  
 ヒタリシコロ眉庇吹返ニモ菱ノ鐵ト云モノ  
 ヲウチ手ノカ、テヌヤウニシタルコトナリ

武門抄卷之百餘  
四方白ノカズト云ハ一向ニ四方ヲ磨キア  
ゲテヤヒハニサハルヤウニシタルモノナリ  
然ルニ二三百年来武士物好強クナリテ筋  
モ星モ刃ヲツケズ菱鐵ノカハリニ菱縫ノ絲  
ト云物ヲ付テ菱モ名目計リニナリテ古風ヲ  
失ヒタリ今ノ武士ハ右ノ刃サキスルドキ胃  
ハ我カ取廻シニ怪我スベキト已ヲ恐ルルヨ  
リノコトナリ太刀刀ノ心持ニテ取リアツカ  
ハ、刃サキアルカブトモ用ヒラルベシ四方  
トイフ名目四方白ヨリ起リタル箇條ナリ近

代八方白ニ方白ナド、云フ名目ハ曾テナキ  
コトナリ

九方子曰。水火之用。不廢於萬古者。誠利近而  
害遠也。四方白之廢於世。亦安知非其害近而  
利遠者乎。

一ツルマキ

庭訓往來ナドニツルマキ糸包ト云フコト見  
ヘタリ今世ニ用ル弓ノ弦ヲ卷クモノニハア  
ラス尤モ弓弦ヲ卷クモノヲモツルマキト云  
フソレハ布衣記北面ノ記録也ニ弦卷ヲ胸ニアテ、

武門古實名目録 卷一 九  
胡録ヲ負フト云フ事アリ古來輕キ者ノ胡録  
ヲ負フニハ弦卷ニカケテ負フコトアリ然レ  
凡コ、ノツルマキ糸包トツ、夕時ハ其義ニ  
アラス是ハ家ノ系圖ヲ隨分薄紙ニ細字ニテ  
寫シ小サク仕立テ、鑑ノ引合ニ納ムコレヲ  
ツルマキト云フ系卷ト書ク我ツリカキノ卷  
モノト云フ心ナリソレヲ入ル、袋ハ今ノ守  
袋ノヤウニ兩口ニテ紐ヲ通シ點ルヤウニコ  
シテ何色ニテモ錦ヲ用ユテモ 右ノ系卷ヲ入ル、ナリ古  
書ニ納系ト書テ糸包ト讀タリ系ト糸ト讀ミ

誤リタルヨリ庭訓時代ニハ專テ文字ヲモ系  
ト云フ字ニ作リシナルヘシ武士ハ家系慥不  
成ハ四五代以前ヨリ久由緒書ヲ小ツルマキ  
ニ仕立テ鑑匱ニ納メ置クヘキ事ナリ  
一糸以、ミ  
右ニ見ヘタリ  
一ホロヲ臺ニ上ルノ義

ホロヲ臺ニ上ルト云フハ大將タル人ノ討死  
スルト云フ事ヲ惣軍勢ヘ知ズル業ナリホロ  
ニハ七手ノカケハヅント云テ紐ノカケハヅ

シニ習ヒアルモノナリ最下ノヒホヲ鎮ノ紐  
ト云フ是ヲ解テ鐙ノ鼻ヘク、リ付ルナリソ  
レユヘ鐙ノ鼻ヲホ口付トモ云フナリホ口ハ  
負タルモノナルニ是ヲ鐙ヘク、リ付テハ下  
ヘオリ立ツベキヤウナシ馬上ニテコノマ、  
誇ルスルゾ再ヒ馬ヨリハ下リヌゾト衆ヘ示  
ス意ナリコノ場持チ堪ヘ難クコ、ヲ退テハ  
武ヲ汚スユヘ討死ニ決定シタルゾト云フコ  
トヲ急ナル時一ニ觸レ流スコトナラス諸  
軍勢ハ常ニ大將ノ本陣ヲ目當ニスルモノユ

ヘ是ヲ見テウチ死ト合點サスルナリサテ大  
將ノウチ死ト見ルナラハ諸軍勢踏止リテ防  
クコト必ラス強シホ口ヲ臺ニ上ル臺ノ字題  
ノ字ノ誤ナリ臺題和音同キユヘ後世誤テ臺  
ニ作ルナリ軍防令釋ニモホ口ヲ題ノ將ノ死  
ヲ決ストアリ諸軍勢ヘ知ス名題ニ上ケテ見  
スル印ト云フ義ナリ川中嶋合戦ノ時信玄ノ  
舍弟左馬助信繁信玄ノ旗本甚危シト見テホ  
口ヲ臺ニ上ケラレシカハ其手ノ者共フミ止  
リテフセギシユヘ信玄旗本切り崩サレスト

云ドモ信繁ハウチ疾ナリコノホロヲ臺ニ上  
 ルコトハ甲州山鹿北條諸流ノ軍學者等傳授  
 事トノ輒夕人ニ傳ヘズ神文ヲ取テ傳ル事ナ  
 リソレ故ホロヲ上ル傳ト云ヘバ彼流義ニハ  
 重キコトスルナリ古來ハ傳授事ニアラス  
 其時代傳授事ナラバ信繁是ヲ用ヒタリトモ  
 諸軍勢何ノ事トカ合點スベキヤ然レハ無益  
 ノ事ナルベシ信玄ニ始リタル事ノヤウニ申  
 シナスハイヨク僻言ナリ終ニナキ事ヲ信玄  
 致シタラバトテ誰カ是ヲ知ラシヤ軍道古實

スタレテ箇様ノ事マテ傳授事ニスルヤウニ  
 成リタルハ淺間敷事也

大九方子曰其然豈其然。

一忍ノ緒ノ義

胃ニ付タル緒ハ只胃ノ緒ト云フナリ別ニ長  
 サ八寸ノヒホヲ二筋懷中ノ胃ノ緒ヲ大抵ニ  
 シメテ而ノ後ニシコロノ下ニテ右懷中ノヒ  
 ホニテ後日ノ方ニ付テ前ノヒホト一所ニク  
 、ル是ニテシコロアカラズ猪首ニナルナリ  
 是ヲサヘ解ケハ前紐ヲ解クニオヨバズ胃ハ



武門故實百箇條 卷一 卅四  
脱ル、ナリサテカブトノ自由ニ脱ゲサルハ  
紐ヲ不結ユルク結ブト右ノ通り後口ノヒホ  
ニテカタマルナリコノヒホハオモテへ不見  
ユヘ忍ノ緒ト云フナリ古物彙典ナドニハ胄  
ノ緒同ク忍ノ緒トアリ被甲者流常ノ胄ノ緒  
ヲ忍ノ緒ト心得テ居ルハ何故忍ト云フ義ニ  
心付サルヤ怪ムベシ

一太刀馬代ヲ以テ禮トスルコト上古ノ式ノ義  
武家作り太刀並ニ馬一匹ト書テ馬ヲ不贈代  
金ヲ贈ルコト畢竟畧禮ニテ亂世實用ニ行ヒ

難ク只金子ヲ贈ルタメナレトアラハニ金子  
ハ贈リカタキユヘ馬代ト稱メ是ヲオクルナ  
リ太刀ハソヘ物ナリ故ニ作り太刀ヲ用ユ然  
ルニ實ノ太刀ヲ人ト許ヘオクルヲ真ノ太刀  
ト號ス太刀ト云ヘハ實ニ太刀ガ本義ナレハ  
真ノ字ヲソヘズト作リ太刀ノ方ニヨソ假太  
刀ト云フ名目アルベケレト馬代ニ付テ贈ル  
事假ノ太刀ガ始リナレハ却テ真ノ太刀ト云  
フ名起レリ太刀ヲ作り物ニシテ通用スル事  
武家繁昌ヨリ公家ヘモ移リ今ハ公家ニモ專

ラ是ヲ通用ス箱肴ト稱シ中ニハ乾魚一二枚  
入レテ公家ニ往來スルモノモ作り太刀ヨリ  
又略禮起リタルモノナリ作り太刀ノ至テ略  
禮ナルハ禁中ノ八朔ナリ諸公家ヨリ禁中へ  
献上ノ太刀ニ折紙ハナシ作り太刀ノ足緒ノ  
處ニ紙札ヲ付ケ中山大おこんいし山さゝる相  
ナド、カナ交リニ書キ其家ノ侍長橋ノ玄關  
ニ持參取次ニハ御使番ノ侍出テシカト口上  
ニモ及バス太刀受取り渡シアリ其時太刀ヲ  
ハ受取り其名札バカリ結メヲ解キ取り太刀

ハ使者へ返ス女中ヲ以テ御局ニテ披露可仕  
旨口上ニテ返ズ使者ハ札バカリ渡シ太刀ハ  
持テ歸ル是レ作り太刀ハ元來畧禮ナルニヨ  
リテ次第ニ如此ナリシト見ヘタリ唐書ニ班  
劍何人ナリルハ天子行幸ハ左右ヲ行列スル  
役人ヲコトナリ各作り太刀ヲ用ル由ナリ天  
子ニ近ヅク者帶劍ヲ許サズ行列マデノ備ト  
見ヘタリ作り太刀ハ是等始リナラント思ヒ  
シガ日本記ニ眞ノ太刀假ノ太刀ノ事アリ進  
上物ニハアラストイヘ是ハ唐ノ代ヨリ遙

カマヘノ事ナリ御當家繁昌ヨリ作り太刀ヲ  
 以テ往來スルコト專ラトナリタレト盛長日  
 記ヲ考ルニ太刀折紙ノ禮ノ事アリ是ハ假太  
 刀トハ見ヘ子ト太刀折紙ヲ以テ往來スル事  
 ハ古式ニ見ヘタリ

九方子曰。略之又略。吾不知其所至。

昔口土ニテ延ス折紙ハ折紙トナリ折紙トナリハ  
 ハ折紙トナリ延ス折紙トナリ延ス折紙トナリ

